女教師彩花二十四歳

第七巻

運動会でコスプレする女性教師 ―後篇―

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　極限の綱引き
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説
※海老沢薫ＢＬＯＧ
・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。
https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■著作権について

「**女教師　彩花二十四歳　第七巻　運動会でコスプレする女性教師―後篇―**」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

教師になって初めてクラス担任として迎えた運動会は、彩花にとってまさに悪夢とも言うべきものになっていた。幾つものハプニングが重なり、想像以上の生き恥を何度も晒し、半ば放心状態でクラスの応援席に座る美人女性教師。

教師としても一人の女性としてもその尊厳を酷く傷つけられてしまった彩花は、一体これからどうなってしまうのか、何が待ち受けているのか、これからどうすればいいのか、何も分からなかった。

そこにクラス委員の智子達が近づき、中学三年生によるクラス対抗の綱引きへと彩花は連れ出されたのだ。

あられもない姿でグラウンドのド真ん中に立ち、生徒と一緒に太い綱を引く美人女性教師の姿に、応援席に座る生徒達、保護者席に座る母親達、そして同僚の教師達も釘づけになった。

「オーエス！オーエス！」

生徒達の掛け声に合わせて懸命に綱を引っ張る彩花。するとその時、またしてもクラス委員の智子の企みによって、彩花はどうしようもない屈辱のショーを繰り広げることになるのだった。

グラウンドのド真ん中でガニ股の体勢で腰を振り乱しながら懸命に綱を引く美人女性教師。その姿は、あまりに惨めであると同時に大勢のギャラリーには滑稽にも映った。

やがて、運動会のすべての種目が終わり、優秀選手たちの名が告げられる中、前代未聞の醜態の限りを尽くした美人女性教師に思いがけない制裁が下される。

■第一章　極限の綱引き

中学校の運動会が行われているグラウンドには異様な熱気が立ち込めていた。借り物競走でグラウンドをあられもない恰好のまま四つん這いで一周させられた美人女性教師は、あろうことかすべてのギャラリーが注目する中で今日三度目の絶頂を果たしてしまったのだった。

応援席に座る生徒達、保護者席に座る母親達、そして本部席に座る同僚の教師達も皆、その姿に言葉を失い、あまりに衝撃的な光景の余韻にまだ浸っていた。そして、運動会で三度も絶頂姿を晒してしまった彩花は、智子達によって体を支えられ放心状態のまま応援席へと戻り、羞恥に体を小刻みに震わせながら最前列の椅子に座らされていた。

彩花の秘部には、さっき智子から渡されたローターがまだ埋め込まれたままで、彩花は

体を火照らせながら、いつ智子の手によってまたそのリモコンのスイッチを入れられ、再び快感地獄に襲われるのかと怯えていた。

「先生、さっきのイキっぷり最高だったわよ」

「あんな姿をみんなに見られたら、もう私達に偉そうな事言えないね」

「これからどんな顔して私達に英語を教えるつもりですかぁ」

「今度、授業の時にも先生のイクところを見せてくださいよ」

彩花のクラスの女子生徒達は、素っ裸で応援席に座る担任の美人女性教師をからかった。

普段なら、こういう時には毅然とした態度で生徒達を注意する彩花であったが、あれほどのはしたない姿を大勢のギャラリーの前で晒してしまった以上、恥ずかしくてとても注意する気にもなれず、黙って生徒達の冷やかしの言葉に耐えるしかなかった。

「・・・」

「先生、そろそろクラス対抗の綱引きが始まるから行きますよ」

彩花の背後からそう声を掛けてきたのはクラス委員の智子だった。

「えっ？」

体に残る快感の余韻が未だ冷めない彩花は、頭の中がボッーとしたままで、次に自分が参加しなければいけない競技の事をすっかり忘れてしまっていた。

「先生なにボッーとしてるんですか、担任がそんなんじゃ勝てるものも勝てなくなるんでしっかりしてください！」

「そうですよ、先生には先頭を切って頑張ってもらいますからね！」

彩花のクラスの生徒、ありさと久美も全裸の女教師に厳しい言葉を投げ掛けた。

彩花はまたしても素っ裸のまま、智子達によって応援席から連れ出され、入場口へと歩かされた。途中、大勢の生徒達の好奇の視線が彩花の剥き出しの肌に突き刺さり、彩花は

両手で胸と股間を隠しながら恥ずかしそうに俯き歩いた。

あぁ、お願いそんなに見ないで・・・。彩花は心の中で必死に願ったが、彩花が歩く道には、美人女性教師の裸を少しでも近くで拝もうとする大勢の生徒達がひしめき合い、中には彩花の体に手を伸ばして触ってくる生徒までいた。

「ヤッター、彩花ちゃんのオッパイ触ったぁ！」

「俺はお尻触ったぜ！」

どさくさに紛れて彩花の体を触った男子生徒達は大いに盛り上がり、嬉しそうに触れた手を掲げて見せ合っていた。

「キャッーなによこれぇ」

彩花の体を触った女子生徒の一人が縮れた黒い毛を周りにいる友人達に見せびらかしていた。

「それってもしかして先生のアソコの毛なんじゃない」

「ヤダぁ、抜いちゃったの？」

親友が美人女性教師のアソコの毛を抜いたと分かると、女子生徒達は爆笑しながら興味深げに女教師の陰毛を観察していた。

「お願い、先生に触らないで・・・」

剥き出しの体に次々と伸びてくる生徒達の手を避けながら、彩花は懇願した。

「素っ裸になった先生がいけないんでしょ、触られるくらい我慢しなさい！」

彩花のすぐ傍を歩く智子は、恥ずかしそうに歩く担任の女教師を叱りつけると、その脂の乗ったお尻をピシャっと叩いた。

「痛いっ」

彩花が痛さに思わず顔を歪めると、周りを取り囲んでいる生徒達から笑いが漏れた。

入場口では次の競技に出場する生徒達が整列して並んでいた。その中に体操着姿の生徒達に交って並ぶ全裸の美人女性教師の姿があった。

『それではこれより三年生によるクラス対抗綱引きを始めます。選手入場！』

グラウンドに進行係のアナウンスが流れると、入場口に並んでいた三年生の生徒達はグラウンドに向かって一斉に行進を始めた。

「ウォッーすげぇ！」

「木元先生まさか素っ裸で綱引きやるのか！」

「教師が一人だけ全裸って面白過ぎるんですけど」

「露出狂の淫乱教師には服なんていらないよ」

応援席に座る一年生と二年生の男子生徒や女子生徒達は、素っ裸の魅惑的な体を隠す事もなく顔を真っ赤に染め上げながら両手を前に振り行進する美人女性教師を面白そうに眺め、思い思いの感想を言い合っていた。

「まぁ厭らしい。今度は素っ裸で綱引きまで参加するつもりなの？一体あの先生はどういう神経をしているのかしら」

「幾らなんでもやり過ぎじゃありません。風紀的に大問題ですわよ」

「まあまあ、運動会なんですから大目に見てあげましょうよ。それに、あんな美人な女の先生がとことん恥を掻くところを見られるなんて最高じゃないですか」

保護者席でいきり立つ母親達を慰めたのは、智子の母でPTA会長を務める北野みどりだった。みどりは保護者席から意味深な笑みを浮かべてグラウンドを素っ裸で行進する彩花を見つめていた。

中学三年生の四クラスの生徒と担任がグラウンドの中に整列すると、最初に綱引きをする彩花のクラスともう一クラスの生徒達が中央に置かれた綱の横に並んだ。素っ裸の彩花はなぜかクラスの生徒達の一番前のポジションに立たされ、ちょうど綱の中央の位置に構えた。すぐ目の前には戦う相手クラスの女子生徒が不敵な笑みを浮かべながら全裸の美人教師の方を見つめていた。

「先生、乳首が勃ってますね」

彩花の前に立つ相手クラスの女子生徒がおもむろに彩花に告げた。

「えっ・・・あぁん、見ないで」

自らの恥ずかしい性的な反応を指摘された彩花は思わず喘ぎ声を発し、豊満な乳房を両手で隠した。

「先生、何やってるんですか、これから戦うんですから真面目にやって下さい！」

彩花のすぐ後ろに立つ智子は厳しい口調で担任教師を叱責すると、その剥き出しのお尻をさっきよりも強い力でお尻を叩かれた彩花が苦悶の表情を浮かべると、彩花の周りにいる生徒達だけでなく、応援席に座る下級生達からも笑いが漏れた。

「痛いっ」

ピシャッと叩いた。

彩花は痛みを堪えて綱を両手で握りしめ腰を落とした。すると、スタートを告げるピストルが打ち鳴らされ、クラス対抗の綱引きがついに始まったのだった。互いのクラスの生

徒達が力いっぱい太い綱を引き合い、綱は一進一退しながらもほぼ中央の位置から動く事なく互角の戦いが繰り広げられた。

「みんな、絶対勝つよ！先生ももっと踏ん張りなさい！」

クラス委員の智子の大きな叫び声がクラスメートや担任の彩花の耳元に轟き、彩花は素っ裸のまま豊満な乳房を揺らしながら綱を懸命に引っ張り続けた。その姿は応援席に座る下級生達だけでなく、保護者席に座る母親達や同僚の教師達の目にもあまりに滑稽に映り、皆笑いながら全裸の美人女性教師が必死に綱を引っ張る様子を見つめていた。

「オーエス！オーエス！」

綱を引っ張り合う生徒達の掛け声が地鳴りのようにグラウンドに響き、それに合わせて彩花も腰を上げたり下げたりしながら綱を引っ張った。

するとその時だった。彩花の秘部に埋め込まれているローターが突然振動を始めたのだ。

「あぁぁん・・・いやぁぁ」

彩花は思わず恥ずかしい声を発すると、腰を前後左右に厭らしく振り乱した。

「先生、真面目にやって下さい！」

彩花の真後ろで綱を引く智子が檄を飛ばした。

「あぁぁん・・・お願い止めて」

彩花は、背後にいる智子の方を振り向き懇願した。智子が体操ズボンのポケットに忍ばせたローターのリモコンのスイッチを入れたに違いないのだ。こんな場所でこれ以上ローターを振動させられ続けたらどうなるか、彩花は想像するだけでゾッとした。

「先生、なに訳の分からない事を言ってるんですか、ちゃんと綱引きに集中して下さい！」

智子はまったく彩花の言葉を聞き入れようとはせず、ローターの振動もまるで止まる気配がなかった。

「そんな・・・あぁぁん・・・どうしてこんなことするの・・・あぁぁ」

彩花は悶えながらもローターの刺激に耐えて綱を引っ張り続けるしかなかった。

「オーエス！オーエス！」

周りで響く生徒達の掛け声が、秘部で蠢くローターの振動をさらに増幅させているかのような錯覚を彩花にもたらした。

あぁん、このままじゃ私またイッてしまうかも知れない。彩花は綱を引きながらも次第に体の中で高まる官能の波に意識ごと呑み込まれそうになっていた。

「先生もちゃんと声出して！」

智子の容赦ない罵声が響き、彩花は腰を前後左右に振り乱しながら、生徒達と一緒に掛け声を放った。

「オー・・・あぁん・・・エ～ス・・・あぁぁん・・・エぇぇスぅ」

彩花の声は掛け声というよりほとんど喘ぎ声であった。彩花の周辺で綱を引っ張る生徒達

は、女教師の異変にすでに気づいており、今日四度目の絶頂が近い事を予感していた。

「先生、イクならこの勝負に勝ってからにして下さい！」

「もし負けたら先生のせいですからね！」

「そんなにお尻振らないで、もっと真剣にやって下さい！」

彩花のクラスの生徒達は、先頭で綱を握る素っ裸の担任を責め立てた。

「あぁん、ごめんなさい・・・あぁぁ」

彩花はもうすっかり快感に酔いしれ、綱を引く手にも力が入っていなかった。そして、彩花は気づいていなかったが、彩花が踏ん張る脚元の地面には女教師の秘部から滴り落ちる蜜でびっしょりと濡れてしまっていたのだ。

「あぁぁん、もうダメぇ」

彩花がいよいよ絶頂を迎えようとしたその時、突然、彩花の秘部で蠢いていたローターの振動が止まり、同時に綱が一気に彩花の背後へと引っ張られ、彩花のクラスは見事一回戦に

勝利したのだった。彩花のクラスの生徒達は雄叫びを上げながら喜んでいたが、絶頂寸前で生殺しにされた彩花だけは何とも複雑な表情を浮かべていた。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■そのほかＳＮＳ

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

https://www.pixiv.net/users/70200870

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈２５歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885